

2022年度一般選抜  
事前提出課題  
《問題用紙》

次の文章は、ドイツの「スポーツクラブ」と日本の「運動部活動」とを比較したものです。次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

## ドイツのスポーツクラブには体罰、怒鳴り声、しごきがない

### 勝利のための「戦士集団」ではない

次に考えてみたいのが、ドイツのスポーツクラブには体罰やしごきがないことです。日本の体育会系部活は「キビキビした動き」「大きな声で返事やあいさつ」「練習中の声出し」など集団の厳しい雰囲気があります。それに比べるとドイツのスポーツクラブは「ゆるゆる」です。日本の指導者の中には「こんなに甘やかして、試合に勝てるのか!」と思う人がいるかもしれない。

しかし、スポーツクラブは組織の性質としてみると、「同好の士」の集まりで勝利のための「戦士集団」ではありません。何よりも、メンバーになっている人々の生活の質を高めたり、身体の状態をよりよくしたりする厚生が目的です。もちろん試合も行われ、勝つために努力する人もいます。しかしトップアスリート以外はあくまでも趣味の範囲です。自分のレベルで楽しみの範囲で試合に出ている。トップアスリートでさえも、あくまでも学業と並列に考えてトレーニングに取り組んでいます。

制度面でいえば、リーグ制に着目するとよいでしょう。例えばサッカーのブンデスリーガ（連邦リーグ）といえ、第1部のトップリーグをさしますが、これを頂点に第6リーグまでがドイツサッカー連盟の管轄です。それ以下の州レベルになるとさらにまた何段階もあります。ちなみに第3リーグまでがプロです。

リーグ戦はご存知のように対戦を繰り返し、シーズン中の総合成績で順位を競います。ですから高校野球のように一回の試合で敗退というようなことはありません。そのせいか、子供や若者の試合を見ていると、実力的には補欠クラスと思われるメンバーでも、適宜トレーナーは交代させてプレーしています。

またサッカーのみならず実は他の競技でも「ブンデスリーガ」があります。また、個人にとっては実力に応じた段階のクラブに入れば、きちんとゲームに参加でき、あくまでも生活の中の楽しみや自分の実力に応じたチャレンジとしてスポーツができるわけです。

体罰やしごきといったものも、見られません。子供のときや、10代のときにスポーツをしていたことのある人たちに、日本の体罰の問題を説明しながら、「体罰があったかどうか」きいてみました。しかし著しい遅刻やユニフォームを忘れたことに対して、「腕立て10回なんかはあったけど、日本のような体罰はなかった」というような答えがかえってきました。

それに対して日本の部活をスポーツ組織として考えると、試合に出て戦績をあげることや、記録を伸ばすことに偏重気味です。私学になると、戦績と学校経営が関連するところもあります。そのため部活顧問にとっては経営側からのプレッシャーもあるのでしょうか。いさか斜に構えてみると、選手たちは学校経営のために活用されているようにもとれます。

ともあれ、戦績重視の学校になると、なんとしても勝てる「スポーツ組織」にしようということになります。そこでモチベーションを高め、チームの統率をはかるために体罰を与え、練習で「しごく」というようなことが一般的な「方法」として行われたのでしょう。「気合を入れる」ためには「声」も重要な要素です。大きな声であいさつすることや、練習中の「声出し」、指導者が大声で指導することともつながっているように思えます。こういう現場で指導者が未熟だと、高まった感情と結びつき、もはやトレーニングの「方法」ではなくなります。

体罰や頻発する怒鳴り声、それからしごきといったものが、戦績のために選手たちを追い込んでいく方法とすると、ドイツの地域スポーツクラブでは、そこまで追い込む必要がない。繰り返しますが、スポーツ組織としての目的が戦績第一ではなく、厚生にあるからです。

高松平藏(2020)「ドイツの学校にはなぜ『部活』がないのか」晃洋書房 p.110-113

問1 ドイツの「スポーツクラブ」と日本の「運動部活動」の、「スポーツ組織」としての目的は何か。それぞれ、20字～40字以内で簡潔に答えなさい。

問2 この文章を読んで、これからの「運動部活動のあり方」はどうあるべきか。あなたの考えを400字以内で述べなさい。